

MI TOMA KYO ZUKA
三苦京塚古墳



1991
福岡市教育委員会

み とま きょう づか
三苦京塚古墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書第243集



遺跡略号 MTO

調査番号 8860

平成3年

福岡市教育委員会



(1) 1号墳出土遺物

序

福岡市は地理的関係から、先史時代より東アジアと我が国との文化交流の門戸として、発展を遂げてきました。このような歴史的背景から、市内には各時代の文化財が数多く埋蔵されています。しかしながら、近年の都市の発展に伴う開発によって、我々の祖先が地中に残してきた埋蔵文化財が消滅しつつあります。このため福岡市教育委員会では、遺跡を保存すべく各種開発事業に先立って発掘調査を行い、記録保存によって後世に伝えるように努めています。今回報告します三苦遺跡群および三苦京塚古墳の発掘調査報告書は、宅地造成工事に先立って行った発掘調査の記録です。この調査では、福岡市東部における古墳時代の葬送儀礼を明らかにするとともに、社会構造の解明を含む多くの成果を得ることが出来ました。今後、本報告書および資料が、学術研究だけに留まらず、市民各位の文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。最後に、発掘調査にあたりまして調査費用を負担していただいた事業者の三愛建物株式会社ならびに関係各位にたいし、深く感謝いたします。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本報告書は、福岡市教育委員会が平成元年2月18日～同年3月31日において東区大字三苦字京塚157に所在する三苦京塚古墳を発掘調査した記録である。
2. 遺跡名は福岡市教育委員会発行の文化財分布地図一東部Ⅱ-からによる。
3. 発掘調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が行い、同課職員の瀧本正志が担当した。
4. 本書で用いた方位は全て磁北である。この方位は真北より $6^{\circ}21'$ 西偏する。
5. 本書の執筆、編集は瀧本が担当した。
6. 実測は遺構を高橋健治・村上かおり・塩屋直子・瀧本が、遺物を瀧本・高橋がそれぞれ担当し、トレースは大庭友子・真名子順子が担当した。
7. 写真は、遺構・遺物撮影を瀧本が、焼き付けを青柳恵子・日名子節子がそれぞれ担当した。
8. 本書で報告した発掘調査に係わる遺物・記録類の全ては、福岡市立埋蔵文化財センター(博多区井相田2丁目)に収蔵されているので活用されたい。

遺　　跡　　名	三苦遺跡群・三苦京塚古墳群1号墳		
遺　　跡　　略　　号	M T O	調　　査　番　号	8860
調　　査　　地	福岡市東区大字三苦字京塚157		
調　　査　　期　　間	平成元年2月18日～平成元年3月31日		
開　　発　面　積	7,000m ²	調　　査　面　積	320m ²

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査の組織	1
3. 発掘調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	5
1. 遺跡の位置と立地	5
2. 遺跡の歴史的環境	5
第3章 調査の記録	7
1. 遺跡の概要	7
2. 古墳時代の遺構・遺物	8
a. 墳丘	9
b. 横穴式石室	11
c. 遺物	14
3. 弥生時代の遺構・遺物	21
a. 遺構	21
b. 遺物	22
第4章 まとめ	24

挿 図 目 次

Fig. 1 遺跡位置図（縮尺 1/200,000）	VI
Fig. 2 調査風景	2
Fig. 3 周辺遺跡分布図（縮尺 1/25,000）	3
Fig. 4 周辺地形図（縮尺 1/4,000）	4
Fig. 5 調査地位置図（縮尺 1/2,500）	6
Fig. 6 調査地遠景	7
Fig. 7 1号墳現況測量図（縮尺 1/150）	8
Fig. 8 1号墳墳丘遺存図（縮尺 1/150）	9
Fig. 9 1号墳地山整形図（縮尺 1/150）	10
Fig. 10 1号墳墳丘上層図（縮尺 1/80）	折込
Fig. 11 1号墳石室実測図（縮尺 1/80）	折込
Fig. 12 1号墳閉塞施設実測図（縮尺 1/50）	12
Fig. 13 1号墳石室輪観図（縮尺 1/50）	13
Fig. 14 1号墳出土遺物実測図(1)（縮尺 1/3, 1/4 : 1005）	15
Fig. 15 1号墳出土遺物実測図(2)（縮尺 1/2）	17
Fig. 16 1号墳出土遺物実測図(3)（縮尺 1/2）	18
Fig. 17 1号墳出土遺物実測図(4)（縮尺 1/2, 1/1 : 1301, 1401）	19
Fig. 18 住居址実測図（縮尺 1/40）	21
Fig. 19 住居址出土遺物実測図（縮尺 1/3, 1/2 : 2001, 2002）	23
Fig. 20 九州地方出土三累環頭実測図（縮尺 1/2）	25

表 目 次

第1表 出土遺物一覧表(1)	27
第2表 出土遺物一覧表(2)	28

図版目次

表紙写真 調査地遠景（南から）

巻頭図版 (1) 1号墳出土遺物

図 版1 (1) 調査地周辺航空写真（昭和62年頃）

図 版2 (1) 調査地周辺航空写真（昭和23年頃）

図 版3 (1) 調査地周辺航空写真（平成元年頃）

図 版4 (1) 1号墳伐開後の状況（南西から） (2) 1号墳伐開後の状況（南東から）

図 版5 (1) 閉塞施設（南西から） (2) 閉塞施設（北東から）

(3) 美道覆土状況（南西から） (4) 墓道覆土状況（南西から）

図 版6 (1) 墳丘遺存状況（南西から） (2) 墳丘西半部除去後の状況（南西から）

図 版7 (1) 墳丘遺存状況（南東から） (2) 墳丘西半部除去後の状況（南東から）

(3) 墳丘土除去後の状況（南東から）

図 版8 (1) 墳丘土除去後の状況（南西から） (2) 石室掘り方（南西から）

図 版9 (1) 敷石除去後の玄室奥壁部 (2) 敷石除去後の玄室玄門部

図 版10 (1) 玄室床面奥半部敷石状況 (2) 玄室床面奥半部敷石除去後の状況

(3) 玄室床面前半部敷石状況 (4) 玄室床面前半部敷石除去後の状況

(5) 美道床面敷石状況 (6) 美道床面敷石除去後の状況

図 版11 (1) 玄室奥壁腰石の詰石 (2) 玄室右側壁腰石の詰石

(3) 玄室左側壁腰石の詰石

図 版12 (1) 1号墳出土遺物

図 版13 (1) 1号墳出土遺物

図 版14 (1) 1号墳出土遺物

図 版15 (1) 1号墳出土遺物

図 版16 (1) 1号墳出土遺物

図 版17 (1) 1号住居址完掘状況（南西から） (2) 1号住居址覆土堆積状況（北東から）

図 版18 (1) 1号住居址出土遺物

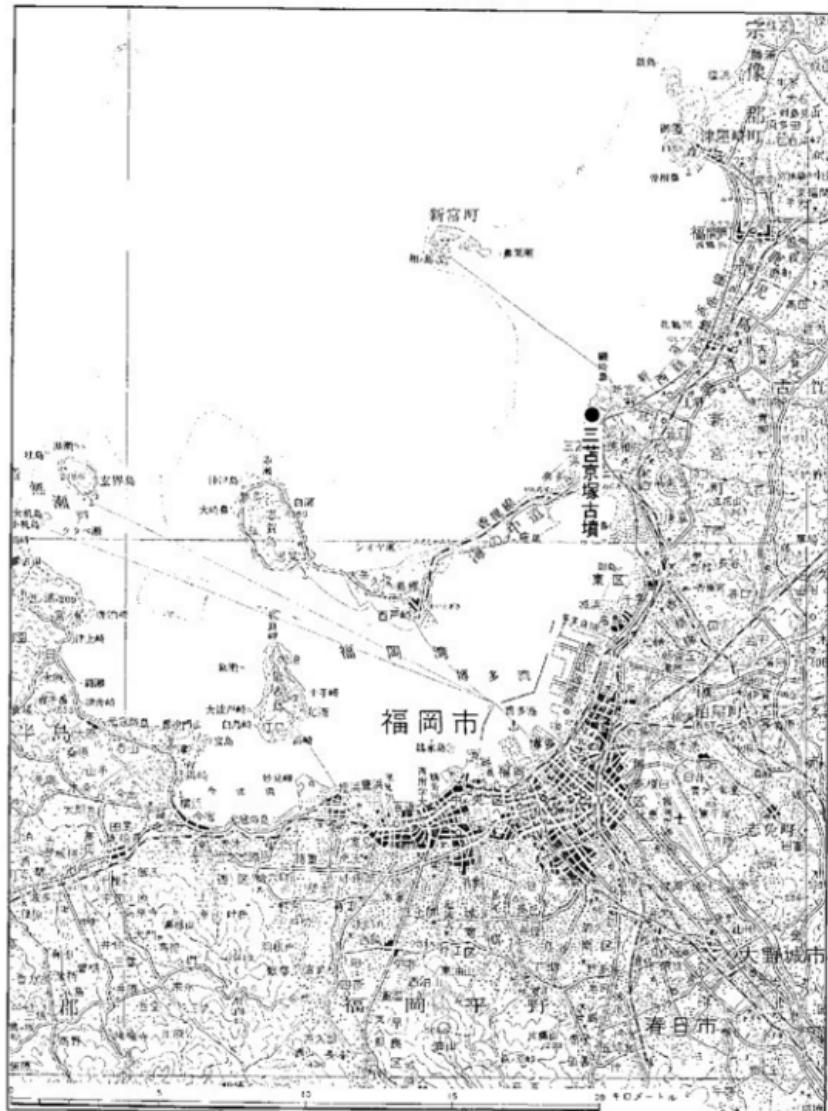


Fig. 1 遺跡位置図 (縮尺1/200,000)

第1章　はじめに

1. 発掘調査に至る経過

近年における福岡市は、九州の中枢都市として発展を遂げている。そのため、人口の増加も他の都市に比べて顕著で、1975年（昭和50年）には102万人であったのが、1990年（平成2年）では121万人になっている。この人口増加に伴う問題の一つに住宅問題がある。すでに都市中央部を中心とした宅地開発は飽和状態を呈しており、最近では近郊の丘陵部開発が中心となっている。本報告を行うこととなった原因も、福岡市東区近郊における宅地開発による。1988年6月15日、土地所有者から埋蔵文化財課に、東区大字三苦字京塚157の宅地造成に伴う埋蔵文化財事前調査の依頼が出された。これを受けた同課は、開発予定地が埋蔵文化財包蔵地域（三苦遺跡群・三苦京塚古墳）であることから、同年7月11日にバックフォーを用いて試掘調査を実施した。その結果、開発予定地域内は過去に大規模な削平を受けており、古墳の他に遺構は認められなかった。その後に土地所有者が変わり、1988年9月12日に三愛建物株式会社から同地を宅地にする計画が再び提出された。これを受けた埋蔵文化財課は、先に行なった試掘調査結果をもとに三愛建物株式会社と協議を行った。その結果、古墳の現地保存は計画上困難であることから発掘調査を行い、記録保存をはかることに決定した。そして、調査に係る費用は三愛建物株式会社が負担することになった。

2. 発掘調査の組織

調査委託	三愛建物株式会社
調査主体	福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課
教 育 長	井口 雄哉 佐藤 善郎(前任)
文 化 部 長	川崎 賢二
埋蔵文化財課長	柳田 純孝
同 課 第 1 係長	飛高 憲雄 折尾 学(前任)
調査担当	同 課 第 1 係 瀧本 正志
事務担当	同 課 第 1 係 松延 好文
調査補助	高橋 健治 (現平尾中学校教諭) 村上かおり 塩屋 直子

調査協力 飯尾絹代、今林ハル子、今林安子、大神チズ子、堺和美、堺クマ、堺登美次、
堺ハツエ、堺久子、堺廣治、堺マサ子、堺由紀子、砂場フサエ、副田テル子、
副田松夫、浜崎キヌ子、浜崎シズ子、堀内トシエ
資料整理 青柳恵子、内山孝子、尾崎京子、斎藤美紀枝、日名子節子、真名子順子、渡
辺ちず子、牛尾美保子
以上の方々の他に、和白公民館の堺憲一館長、山本孝主事、大庭友子、二宮
忠司（調査時埋蔵文化財課文化財主事、現文化課主査）各氏の協力をえた。
三累環頭資料の掲載にあたっては原典執筆者の福岡大学教授小田富士雄氏か
ら快諾していただくとともに、御教示いただいた。

3. 発掘調査の経過

調査は平成元年2月18日に着手し、約1ヶ月半の期間を経て平成元年3月31日に終了した。調査区は、試掘調査報告に基づき、古墳を中心とした320m²を設定した。現況地形図を作成の後、トレーニングを墳丘に設定して掘下げを行うとともに、古墳周辺の表土をバックフォーを用いて除去した。その結果、弥生時代中期の竪穴住居跡1棟が発見された。羨道・墓道部は、検出を行った結果、閉塞施設付近で南西方向に屈曲し、調査区外に延びることが判明した。玄室内の調査は他の部分の調査と並行して行われたが、戦時に防空壕として使用されたり、その他の搅乱を受けている。2月27日に石室石積み状況の調査のために石を取り除く。石の間からマムシが計48匹も出現。石室内実測中に行った行動を思い起こしつつ、3月31日に無事終了。



Fig. 2 調査風景

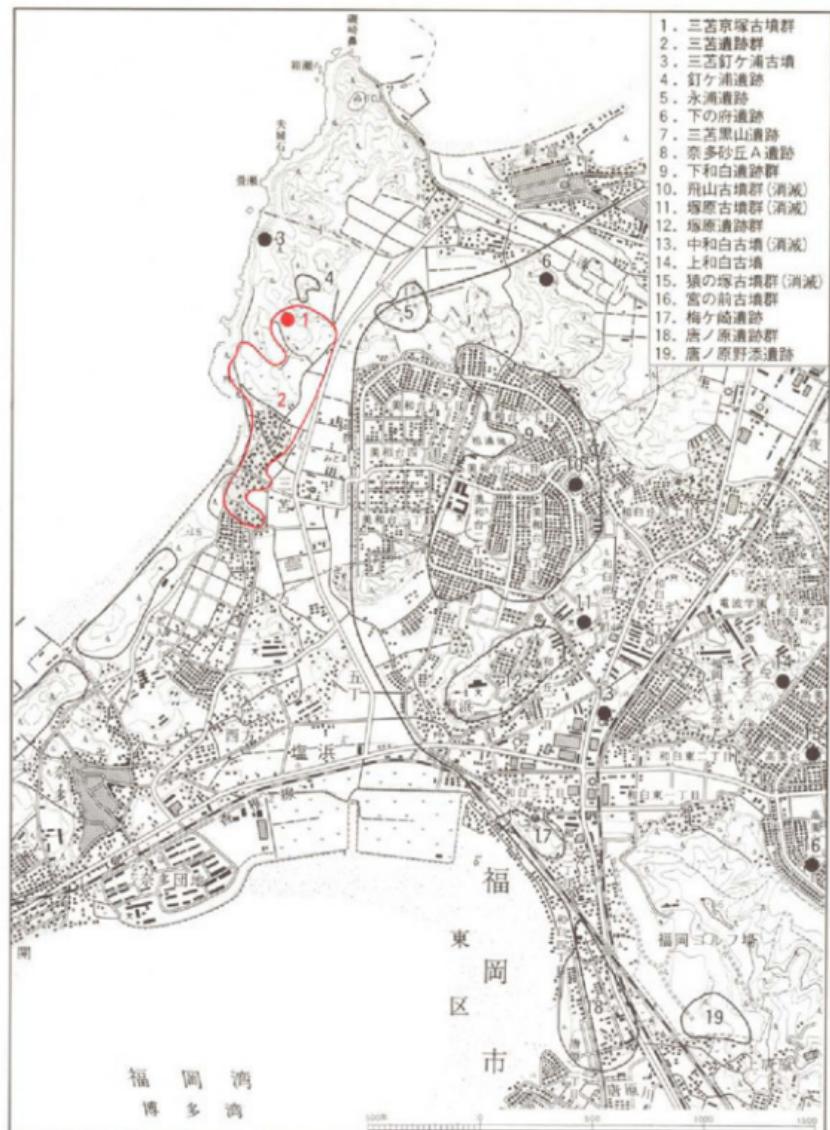


Fig. 3 周辺遺跡分布図 (縮尺1/25,000)

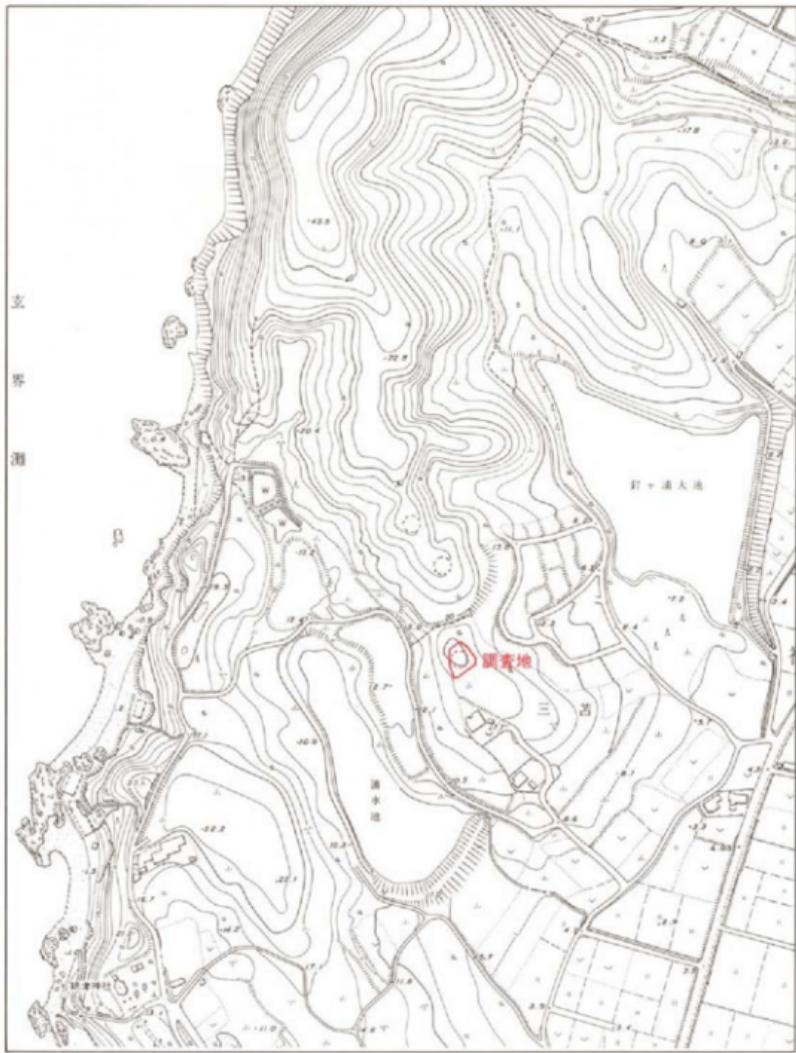


Fig. 4 周辺地形図 (縮尺1/4,000)

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地

三苦遺跡の位置する福岡市東北部はFig. 1に示すように、北は玄界灘に、東は隣接する柏原郡新宮町とを画する低丘陵にそれぞれ接し、西は博多湾と玄界灘とを区分する糸島半島から金印出土の志賀島へ連なる。市域の東辺を画す三郡山地から派生する丘陵は、幾つかの起伏を呈しながら玄界灘に達する。この丘陵の玄界灘に面した先端部に本遺跡が立地する。遺跡の南東に位置する下和白丘陵とは谷によって画され、地形的には独立丘陵の様相を呈し、標高40mを測る。この独立丘陵は南北1500m、東西500mを測る低丘陵で、丘陵はさらに小規模な舌状台地によって構成されている。今回報告する三苦古墳群・三苦遺跡群は、標高10~20mを測るこの舌状台地の鞍部、丘陵南斜面に展開している。

2. 遺跡の歴史的環境

本遺跡群を含む周辺地域の歴史的環境は、これまで既刊の報告書に詳細に言及し尽くされているので、本文末に関係文献を列参してこれに譲り、ここでは本調査地周辺の古墳時代に限定して歴史的環境を概観してみることにする。本古墳群が立地する福岡市東北部は、先に述べたように三郡山地の支脈に属する立花山から派生した低丘陵によって占められ、平坦地部分は丘陵間の僅かな谷部等にしかもとめることができない。河川が存在しない上に、可耕地が極端に限定されるという農業生産における基盤が脆弱な自然条件下においては、稲作等を中心とした生活様式とは異なる生活基盤の存在が求められる。しかしながら、これまでに本調査地周辺においては丘陵部の宅地造成に伴う発掘調査が行われてきたが古墳調査を中心としたもので、生活基盤を解明するための集落等の調査は行われていない。

これまでに行われてきた調査は、何れも本調査地の東南に位置する上・下和白地区の丘陵においてである。これまでの調査で最も古い古墳は、竪穴系横口式石室を内部主体部とする飛山古墳群1・2号墳で、5世紀後半に築造されている。後の古墳はいずれも横穴式石室を内部主体部とする後期古墳で、塚原古墳群・三苦釣ヶ浦古墳・三苦京塚古墳群・高見古墳群・宮前古墳群等がある。しかしながら、これまでの調査では他の地域で同時期頃に築造された古墳と比較しても、石室構造や副葬品に差異は認められず、先に述べた問題解明には至っていない。今回の調査における狙いは、一つに調査地周辺地域における古代の生活基盤の解明を、集落を代表するであろう被葬者の葬送儀礼をとおして発見することにあった。

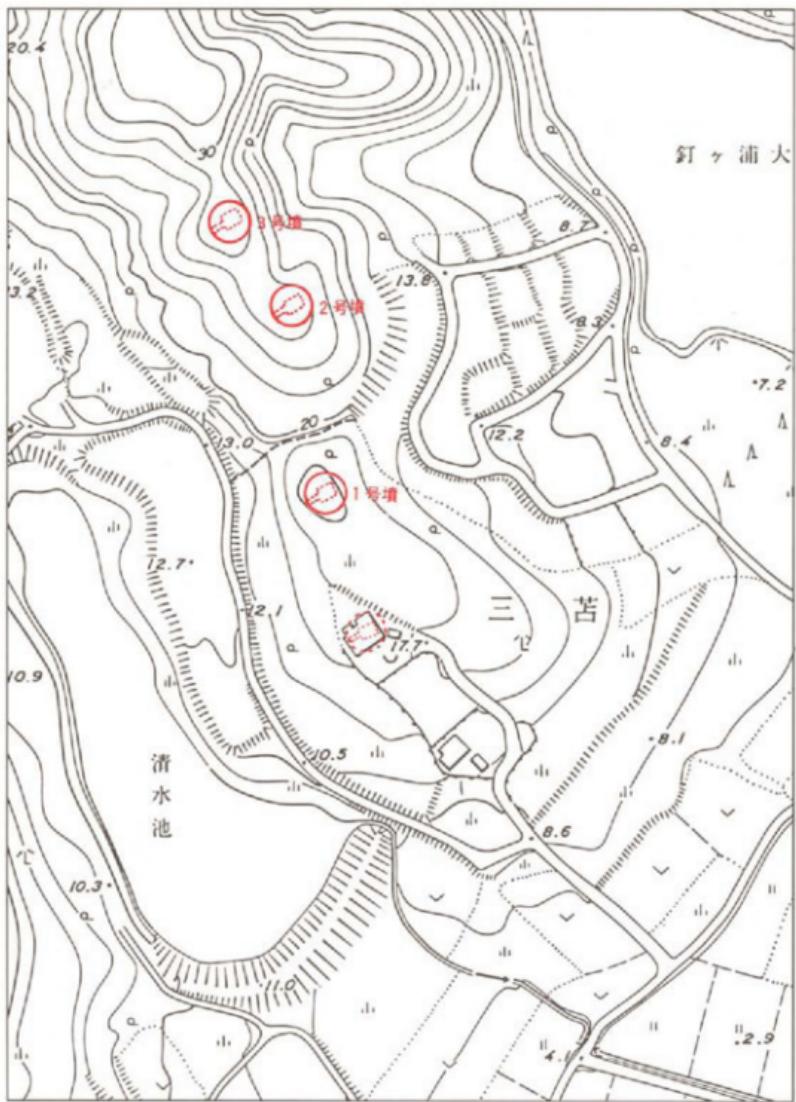


Fig. 5 調査地位置図 (縮尺1/2,000)

第3章 調査の記録

1. 遺跡の概要

三苦遺跡群は、これまでに実施した遺跡分布調査などから、東区三苦の玄界灘に沿って連なる独立低丘陵の南斜面に展開し、その範囲は東西450m・南北950mを測る。同遺跡群内においてはこれまでに発掘調査は行われておらず、遺跡分布調査時における遺物から弥生時代中期の集落の存在を推定するのみであった。

三苦京塚古墳群は、図版1に示すように三苦遺跡群の北端部に位置し、南に延びる舌状台地の鞍部に連続するように造られている。標高は20m前後を測る。古墳群は、3基が残っているが、地元の古老の話から開墾等によって古墳を壊した事は明白であることから、本来は大きな群集墳を形成していたと思われる。残存する古墳は、3基とも円墳である。



Fig. 6 調査地遠景（美和台から）

2. 1号墳

位置と現状 (Fig. 7, 図版4)

古墳群を構成する3基の古墳の中で最も南に位置する1号墳は、南方に延びる舌状台地の鞍部に築造されている。墳丘は半球状に辛うじて残存していたが、東・西部では一部が削平を受けて消失していた。墳丘の西側には人が出入りできる程の大きさの穴が開口し、羨道の天井石が露呈していた。石室内部の床面には掘り穴が至る所に残り、擾乱の激しさを物語っていた。残存する墳丘は2m程の高まりを示し、雑木に覆われていた。

古墳の周辺は大規模な開削が行われているために、古墳築造時の姿を知ることはできない。



Fig. 7 1号墳現況測量図 (縮尺1/150)

a. 墳丘

地山整形 (Fig. 9, 図版 8)

本墳は丘陵尾根筋に直行する位置関係、すなわち斜面等高線にはば直行して石室を築造している。したがって、古墳築造のための地山整形は、丘陵斜面側の周溝の掘削と周溝の内側、すなわち墳丘基底面の整地という作業からなる。丘陵側の周溝の掘削は、古くに開削されて平坦になっているために、地山整形の上端部は不明である。そのために、周溝は残存していない。しかし、旧地形図や古墳の北方30mに残る残丘の状況から、かなり大規模な地山整形が行われたことがうかがえる。



Fig. 8 1号墳墳丘遺存図 (縮尺1/150)

墳丘 (Fig. 8・10, 図版 6・7)

本墳は後世の削平により、墳丘の西・東部、及び頂部が消失して古墳築造時の姿を残していないが、残存する墳丘から造営時の規模・築造技法を十分に復原することは可能である。墳丘の遺存高は、基底面から2.4m、玄室床面から3.9mをそれぞれ測る。墳丘規模は南北トレンチにおける封土の状況から、直径13~15m・墳高3~4mの規模が想定される。墳丘の封土は第一義的には古墳の外形を形成するものであるが、性格的には暈石の安定を目的とするものと、墳丘の成形を目的とするものとに大別される。本墳においても同様な事例が認められる。さらに暈石の安定を目的とする封土も、ほぼ古墳基底面を境にして二つに分類される。すなわち、古

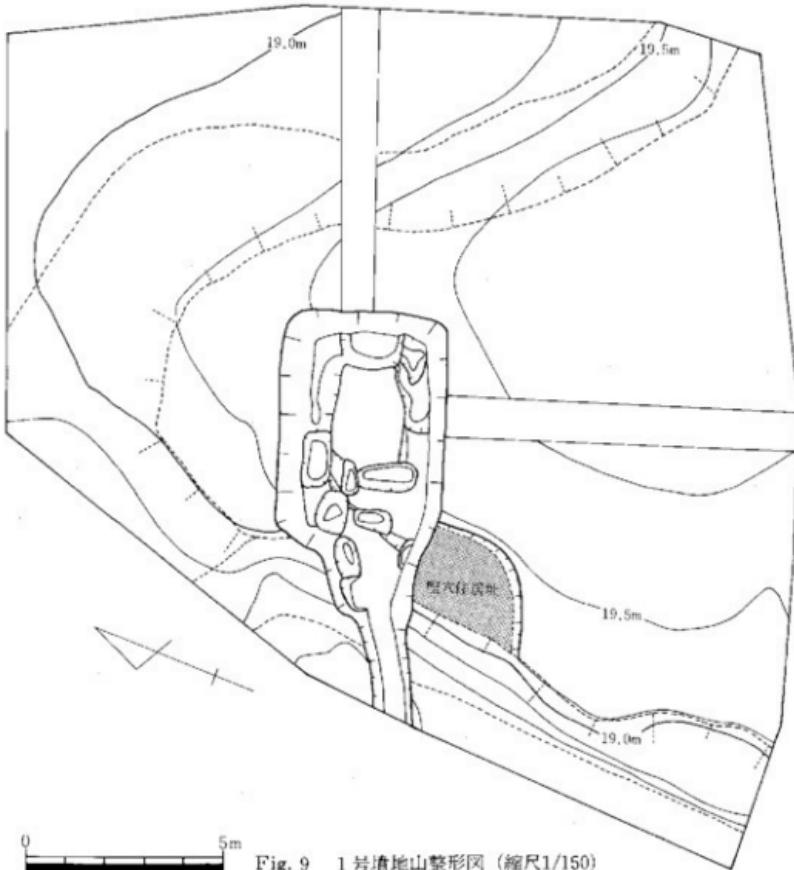
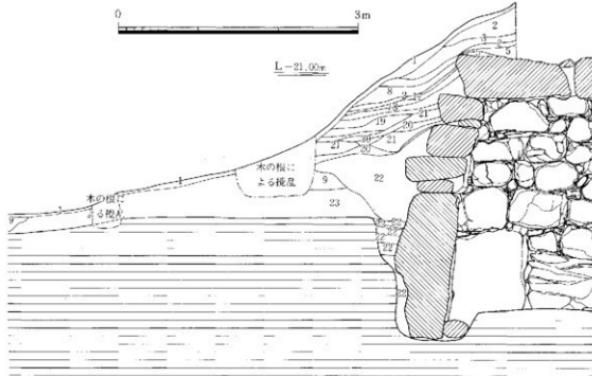
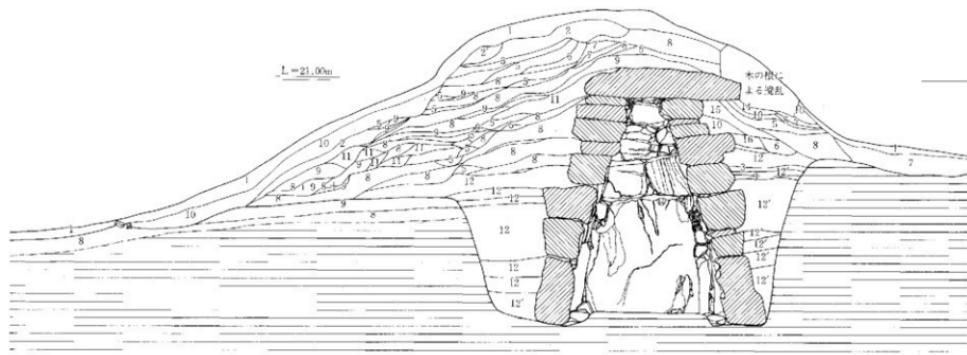


Fig. 9 1号墳地山整形図 (縮尺1/150)



- 1. 表土(暗茶褐色砂質土)
- 2. 淡赤褐色粘質土
- 3. 深赤褐色粘質土
- 4. 砂質粘質土(2.が混ざっている)
- 5. 明茶褐色粘質土
- 6. 明茶褐色粘質土
- 7. 明茶褐色粘質土
- 7'. 7.よりわずかに疑い
- 8. 赤褐色粘質土
- 8'. 8.に11.が混っている
- 9. 黒褐色粘質土
- 10. 明茶褐色粘質土
- 11. 茶褐色粘質土(8.を含む)
- 12. 白色フロックを含む赤褐色土
- 12'. 白色フロックが多く含む赤褐色土
- 13. 明橙色粘質土
- 14. 暗赤褐色粘質土(暗茶褐色の土を含む)
- 15. 明茶褐色粘質土(淡赤褐色の土を含む)
- 15'. 明茶褐色粘質土(やや粘質が強い)
- 16. 淡茶褐色粘質土
- 17. 暗茶褐色粘質土(17.の土と3m前後の石を含む)
- 17'. 暗茶褐色粘質土(3m前後の石を含む)
- 18. 淡茶褐色粘質土(他の土層にくべてやや粘質が強い)
- 19. 暗茶褐色粘質土(明茶褐色の土をフロック状に含む)
- 20. 暗茶褐色粘質土(白色粘質の土を多量に含む)
- 21. 暗茶褐色粘質土
- 22. 暗茶褐色粘質土(白色粘質の土を若干混じる)
- 23. 明橙色粘質土
- 24. 白色粘質土
- 25. 白色粘質土

Fig.10 1号墳墳丘上層図(縮尺1/50)

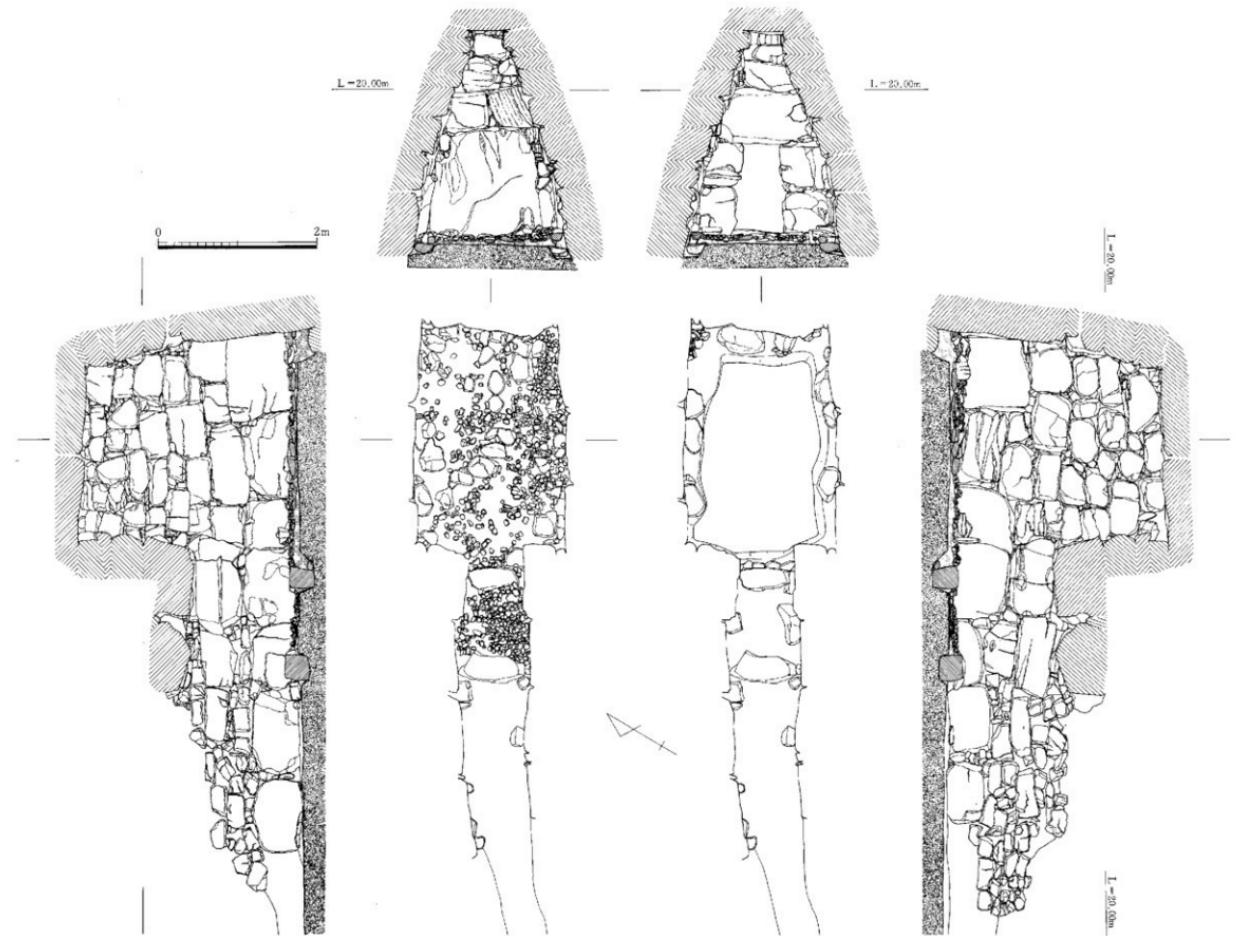


Fig.11 1号墳石室実測図 (縮尺1/50)

墳基底面より低い部分である石室堀り方内における腰石（腰石）の裏込めの場合は、深さ1.5mにわたって層厚10cm程の赤褐色粘質土を連続して突き固めている。これに対して古墳基底面より上部の墳丘は、Fig.10に示すように層厚5~20cm程を測る封土が雑然と置かれて形成されている。この墳丘封土の異なりは、石室の腰石を安定させることに力が注がれていたことを示すと共に、古墳築造のポイントが腰石の据付けにあることを示していると言える。

b. 横穴式石室

本墳の主体部は玄室主軸をN-60°-Eにとり、南西方向に開口、すなわち谷部に向かって開口する單室の両袖型横穴式石室である。石室は漢道部天井が一部欠失しているが、保存状態は比較的良好である。調査では、玄室、漢道および閉塞施設の一部を検出した。玄室および漢道の一部は流土・落石によって50cm程埋没し、玄室に至ってはさらに盜掘等を受けて床面の敷石に至る程の搅乱を受けている。

石室は、長方形プランの玄室と主軸を玄室とほぼ同じくする細長い漢道との連接からなり、深い掘り方内に構築されている。石室全長は、右側壁で6.2m、左側壁で6.5mを測る。漢道の床面は、2ヶ所に襖石が配されている。閉塞施設は漢道前半部に位置する。

石室掘り方 (Fig.10・13、図版8)

石室掘り方は、ほぼ垂直に掘削が行われ、深さ1.6mを測る。平面形は長方形を呈し、幅4.4m・長さ6mを測る。掘り方の底、すなわち墓壙基底面の壁際には、幅40cm前後を測る溝状の凹みが掘られている。これは、石室の腰石を安定して据え付けるために掘削したものである。

玄室 (Fig.11、図版9・10・11)

玄室は、奥壁幅1.7m、前幅1.8m、左右壁長2.7m、天井高2.7mを測り、長方形の平面形を呈する。奥壁は1.6m×1.6mの転石を1個、両壁は1m×1.2m前後の転石3個をそれぞれ配して腰石としている。腰石は、石室掘り方基底面の壁際に掘られた溝状の凹みに据え付けている。さらに、腰石と溝状の中央部側の壁との間に人頭大ほどの石を詰めて丁寧な根固めを行っている。玄室構築の石積みは、奥壁は4段、右壁は5~7段、左壁は6~8段からなる。この段数の異なりは、用いられた石の大きさによる。石積みの方法、すなわち石の使い方は大きく三つに分かれれる。腰石を含む下段では広口積み、中段では横口積み、天井石近くの上段では小口積みがそれぞれ用いられ、総じて石積みの目地は直線を成していない。玄室の天井石は1.5m×2.1mと1.3m×1.7mを測る二個の転石からなり、石の隙間を小石で充填している。玄室床面には、長方形の台状に削り出された地山面に卯大ほどの大きさの玉石と人頭大程の大きさの扁平な石が敷かれている。石敷きの残存は均一ではなく、搅乱によるものであろう。

羨道 (Fig.11・13, 図版6)

天井石および腰石上部の積石を一部欠失するが、比較的保存状態は良好である。幅は玄門で0.7m、羨道端近くで0.7mを測り、側壁は右側壁長3.5m、左側壁長3.9m残存する。高さは1.3mを測る。壁の石積みは、右側壁では1m×0.8m～0.8m×0.5mの転石を4個、左側壁では1m×0.8m前後の転石4個を用いて腰石とし、その上部に1段もしくは2段の石積みを行っている。天井石は玄門部を含む2個が現存するが、羨道壁の状況から築造時には3個もしくは4個で構成されていたと考えられる。樋石は、玄門から羨道端へ1.4mの位置に第一樋石、0.3mの位置に第二樋石が配されている。樋石間には耶大ほどの大きさの玉石が敷かれ、攪乱は認められない。羨道端部の両壁には長さ1m・高さ0.5mの範囲で貼石が残る。羨道床面は、第一樋石までは玄室床面と同じ高さを呈するものの、第一樋石から緩やかな傾斜をもって墓道に移行する。

閉塞施設 (Fig.12, 図版5)

羨道部中央の第一樋石よりやや羨道端側に位置する。転石を積上げて閉塞するもので、現存高1mであるが、本来は天井石との間を完全に密封していたものであろう。墓道側からは雑然とした石積みであるが、内側では階段状を成すもの整然とした石積みである。

墓道 (Fig. 8・13, 図版5・6)

墓道は、その主軸を羨道や玄室の主軸方向と異なり、やや南に方向を変えながら調査区外に延びる。幅0.9m、深さ0.3mを測り、断面形は半円形を呈する。

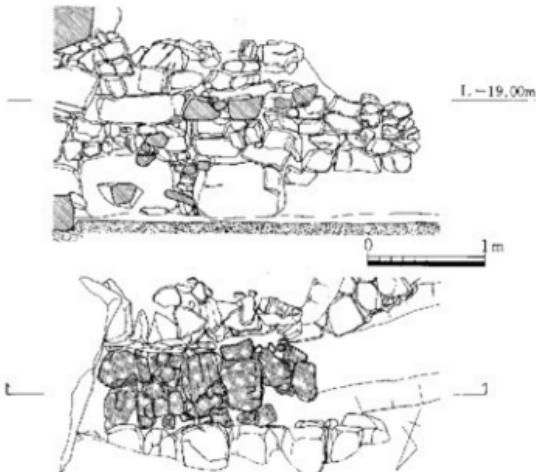


Fig.12 1号墳閉塞施設実測図（縮尺1/50）

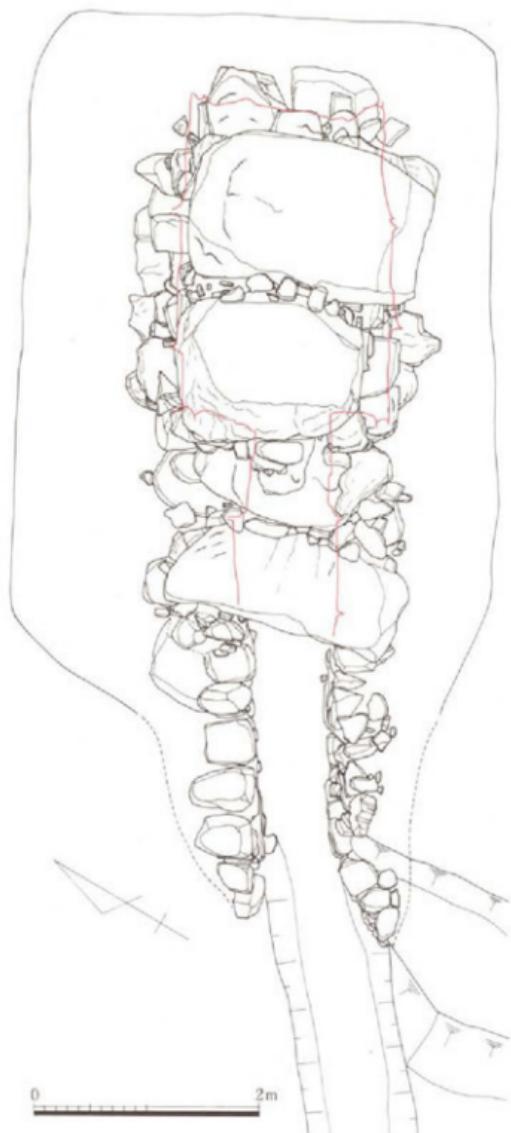


Fig.13 1号墳石室俯観図（縮尺1/50）

C. 遺 物

1号墳から出土した遺物は、須恵器、鉄製武器、馬具、装身具である。出土量は土器がコンテナ3箱、その他の遺物が保存箱に10箱である。遺物の出土地点は、土器の大半が閉塞施設付近、その他の遺物は玄室からそれぞれ出土している。これら遺物の遺存状況は概して良好とは言い難い。これは、多くの遺物が破片となって玄室内で分散して出土していることなどから、後世の擾乱に起因するものであることは間違いない。

須恵器 (Fig.14, 図版12)

壺 (1101, 1102) 出土資料は破片で、どちらも底部を欠く。口径12cm・器高3.5~4cmに復元される。底部は僅かに球形を呈する。口縁部は内傾しながら短く立ち上がる。底部外面は回転ヘラ削り、内面はナデで仕上げている。1101は底部外面にヘラ記号を持つが、破片なために全形は不明。どちらも暗青灰色の色調を呈し、焼き締まっている。

平瓶 体部の破片で全形は知り得ない。体部は球状を呈し、外面にカキ目が残る。

細頸壺 (1003) 口縁部から肩部にかけての破片で、体部以下を欠く。頸部はやや外反しながら直線的に立ち上がり、口縁部は内側に湾曲する。体部は球状か。頸部および口縁部外面にはカキ目が残る。肩部外面にはヘラの刻み目が巡る。口径7.5cmを測る。

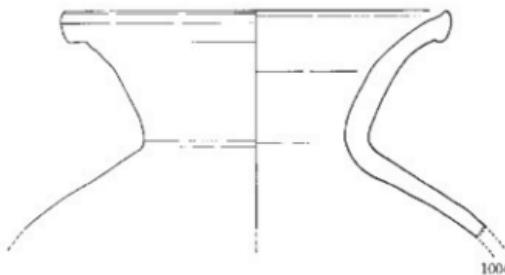
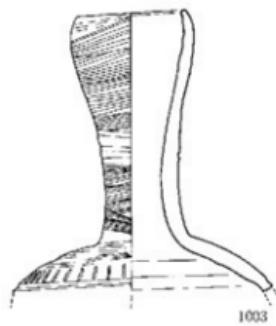
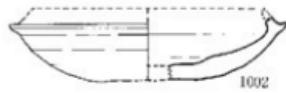
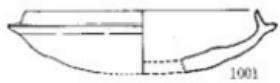
甕 (1004, 1005) 3個体出土しているが全て破片資料で、全形を知り得ない。1004は酸化焰焼成により色調は赤褐色を呈している。いわゆる、土師質的須恵器である。口縁部は外彎しながら立ち上がり、口縁端部はヨコナデで丸味を持つ。復元口径は20cm。1005も口縁部の資料である。口縁は直線的に外反しながら立ち上がる。口縁端部は玉縁。外面には4段に刷状工具による施紋が残る。復元口径は42cm。暗青灰色の色調を呈し、良く焼き締まっている。

武 器 (Fig.15 図版12・13)

大刀、刀装具 (柄頭)、刀子、鉄鎌、飾り/金具 が玄室から出土している。

大刀 (1102, 1103) 刀身は全て小破片となり、全形は不明である。1102は柄部分、1103は切っ先に近い部分である。身幅は3.5cm以上のものである。同化できなかったが、1102と別個体の刀身と茎の区の破片が出土していることから、二振り以上の大刀が副葬されていたのは確実である。

刀子 (1104, 1105) 二振りの刀子が出土しているが、刀身もしくは茎を欠失しており、全形は不明である。1104は茎端部と刃先を欠く。身幅3cm。1105も茎端部と刃先を欠く。復元刃長9.3cm・身幅3cmをそれぞれ測る。



0 10cm



0 20cm

Fig.14 1号填出土遺物実測図(1) (縮尺1/3, 1/1005)

柄頭 (1101) 青銅製の三重環頭柄頭である。玄室断面が半球形の三環を連ね柄尻被せの金具に接合している。柄尻被せの金具の大部分は小片となり、全形は不明である。環身は幅1.4cm・厚さ0.6cmを測る厚肉の造りである。

鉄鍔 (1201~1240) 18個体以上が出土しているが、全て小片で、全形は不明である。平根(1201~1205)と細根(1206~1230)とに大別され、さらに形態の違いから細分される。

I a (1201) 先端が丸く尖り、勝抜がある。鍔身の断面形は扁平なレンズ状。

I b (1202~1205) 先端はやや尖り気味で、柳葉形に近い形態を示す。鍔身の断面形は扁平な長方形。

II a (1206~1210) 鍔身は小さく鋭く、笠被幅より僅かに大きい膨らみを持つ柳葉形。鍔身の長さ2cm・幅1cm前後を測る。長い笠被の断面形は隅丸方形。

II b (1211) 鍔身は笠被幅より僅かに膨らみを持ち、鑿刃状の形態を示す。

飾り弓 (1301~1303) 飾り弓の留め金具と称される鉄製金具で、3点出土した。完形品の1303は長さ3.2cm・厚0.5cmを測り、両端部は球状を呈する。金具に直行して本質が付着している。

用途不明鉄製品 (1701, 1702) 小片で、全形は不明である。方6~8mmの角状棒材の端部をS字状に折り重ね、末端部は径1.2cm程の円形である。円形の中央には鉢が一つ残る。1701と1702が同一個体であるかは不明。

馬具 (Fig. 16・17, 図版5・16)

轡、鎧、辻金具、雲珠、杏葉、飾金具が出土している。多くが小片の状態で出土した。

轡 衛・引手・鏡板が出土しているが全て小片で、全形は不明。全て鉄製。

鎧 全て小片で、全形は不明。鉄製の輪鎧である。

辻金具A (1501, 1502, 1511~1512) 本体・鉢は鉄製金銅張。本体は径6cmの半球形を呈する中心部と幅2.0cm・長1.5cm・厚0.3cmを測る4本の脚からなる。中心部の外面は素面。上半部は欠失して不明。脚の中央部には鉢が1個貫通する。本書では、この金具を辻金具としたが、他の金具、特に雲珠の可能性も否定できない。

1511・1512は方形を呈する金具の破片で、幅2.0cm・長1.2cm・厚0.2cmを測る。縁には接合痕があることから、中心金具の脚であろう。

辻金具B (1521~1525) 本体は鉄製金銅張、責め金具・鉢は青銅製金銅張。本体は径6cmの半球形を呈する中心部と幅1.5cm・長2.2cm・厚0.3cmを測る4本の脚からなる。中心部の外面下部には幅2.5mm~3mmを測る3条の隆線が巡る。中心部の上半部は欠失して不明。脚は、先端の尖る本体、3本の鉢、1個の責め金具からなる。鉢の頭は径3mmの半球状、針部は径1.5mm~2mmの円柱状である。本体・脚部のつくりは雲珠と同じくし、雲珠より一回り小さい。破片から、2個1組が副葬されているようである。

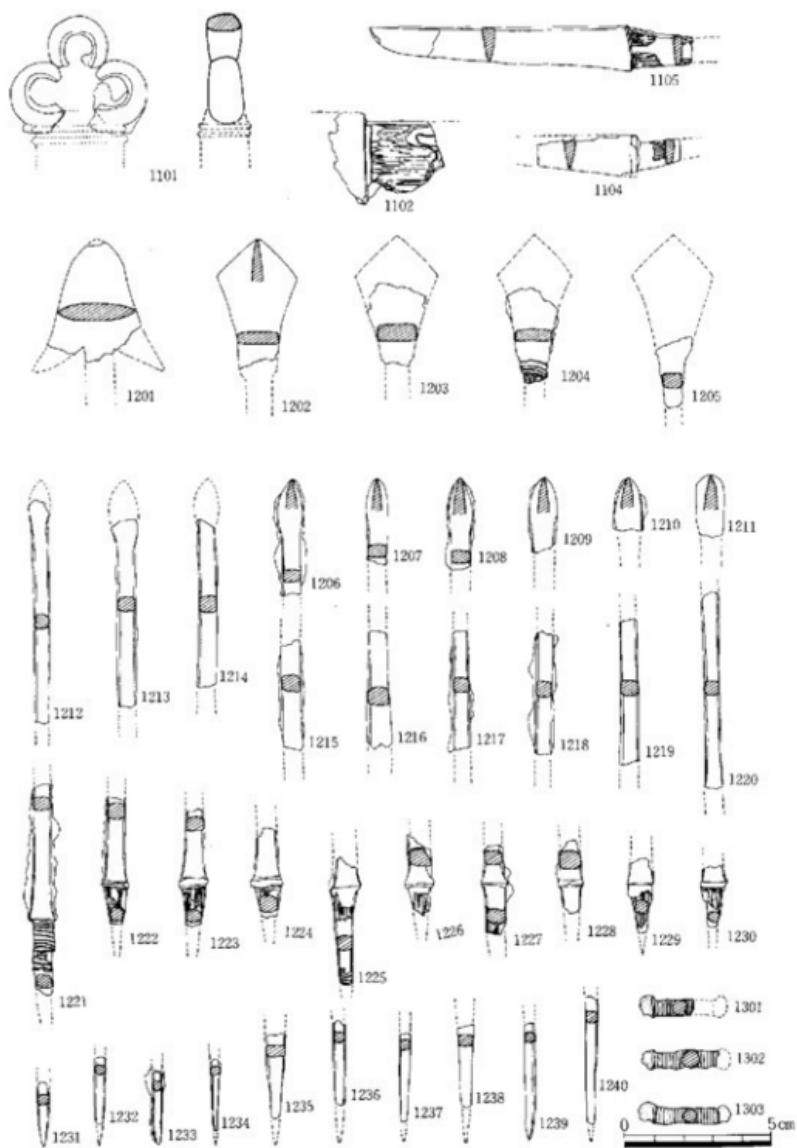


Fig. 15 1号墳出土遺物実測図(2) (縮尺1/2)

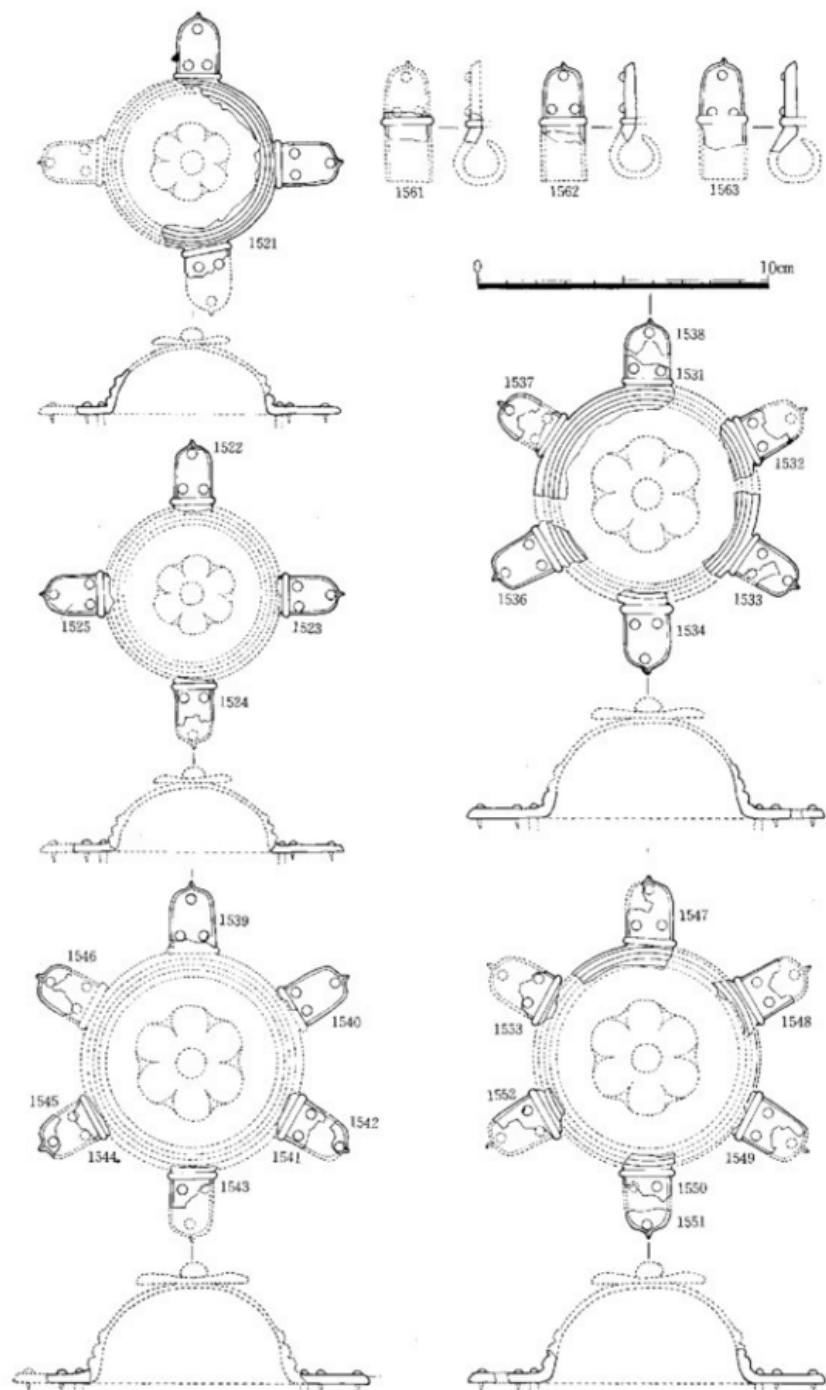


Fig.16 1号墳出土遺物実測図(3) (縮尺1/2)

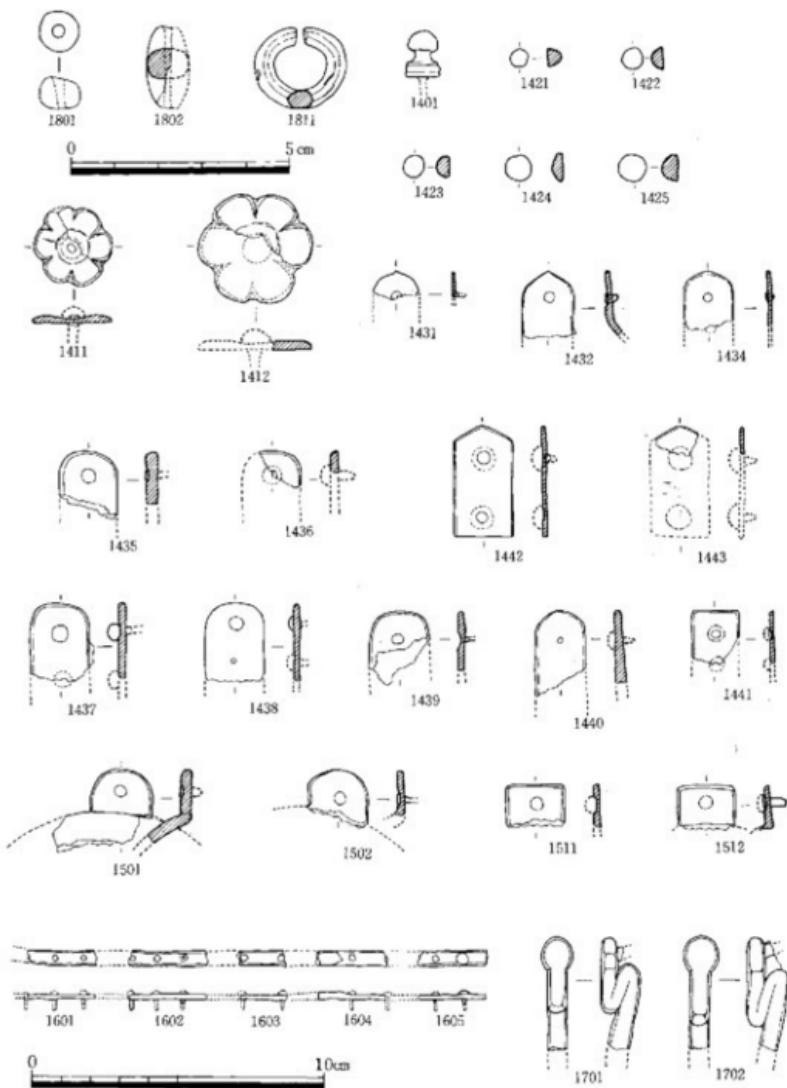


Fig.17 1号出土遺物実測図(4) (縮尺1/2, 1/1: 1801・1401)

雲珠 (1531～1554) 本体は鉄製金銅張、責め金具・鉢は青銅製金銅張。本体は径7.5cmの半球形を呈する中心部と幅1.7cm・長2.5cm・厚0.4cmを測る6本の脚からなる。中心部の外面下半部には幅3mm～3.5mmを測る3条の隆線が巡る。中心部の上半部は欠失して不明。脚は、先端が尖る本体、3本の鉢、1個の責め金具からなる。鉢の頭は径3mmの半球状、針部は径1.5mm～2mmの円柱状である。本体・脚部のつくりは辻金具Aと同じくし、一回り大きい。破片から、2個1組以上が副葬されているようである。

杏葉 (1561～1563) 全て小片で、全形は不明。鉄製金銅張りである。1561～1563は帯に取り付ける金具で、本体は鉄製金銅張り、責め金具・鉢は青銅製金銅張り。形態は辻金具B・雲珠の脚と同じくする。

飾金具 (1401, 1411～1412, 1421～1425, 1431～1441, 1651～1655) 1401は宝珠形を呈する青銅製金銅張の鉢で、針部を欠失している。鉢の頭は長1cm・径0.8cmを測り、下半部には幅1.5mmの隆線が1条巡る。同じ鉢の破片が他に1点出土している。鉄製金銅張の鉢は9点出土している。1421～1425は鉢の頭の部分である。径7～10mmを測る。大きさの違いは、一体をなす金具の多様性を示すものであろう。1411・1412は鉄製金銅張の六弁花文の飾金具で、中央部に1個の鉄製金銅張の鉢が貫く。1411・1412はおなじつくりをしており、1412が一回り大きい。それぞれ2個体分が出土している。1411は径2.6cm・厚2mm、1412は復元径3.9mm・厚3mmを測る。1411は辻金具Aと、一回り大きい1412は雲珠と、それぞれ鉢で一体化していたものと思われる。1442・1443は先端が尖る五角形を呈する金具で、幅2.0cm・長2.8cm・厚0.2cmを測る。2個の鉄製金銅張の鉢が貫通する。

1601～1605は鉄地金銅張りの金具で、全形は不明。本体は、幅5mm・厚1.5mmを測る。中央部には8mmと13mm間隔で鉄地金銅張りの鉢が残る。鞍の縁を飾る飾金具の可能性が高い。

装身具 (Fig.17, 図版16)

ガラス玉、琥珀玉、耳飾が玄室から出土している。

ガラス玉 (1801) 1点が出土している。藍色を呈し、径1cmを測る。

琥珀玉 (1802) 3個体出土しているが全て小片で、図化が可能なのは1301だけである。

耳飾 (1811) ほぼ完形の状態で、1点が出土している。青銅製銀張の耳飾りである。断面形は円形を呈し、7mmを測る。

3. 弥生時代の遺構・遺物

これまでに実施した遺跡分布調査などにより、調査区を含む一帯は弥生時代を中心とした周知の遺跡（三吉遺跡）であった。しかし、調査区の立地する丘陵頂部一帯が大規模な削平を受けていることや試掘調査の結果などから、遺構の残存する可能性は極めて低いと考えていた。調査の結果、弥生時代中期後半の竪穴住居址1棟と弥生時代中期後半頃の土器・石器などを発見した。

a. 遺構

竪穴住居址 (Fig. 18, 図版17)

三吉古墳群1号墳の墳丘下で検出した。大半が古墳築造および開削等により欠失する。本来は径5mを有する円形の竪穴住居址であったと思われる。壁は直に立ち上がり、壁高は40cmを測る。床面の中央部には平面が稍円形の凹みが設けられている。壁面が焼けていることからかと考えられる。

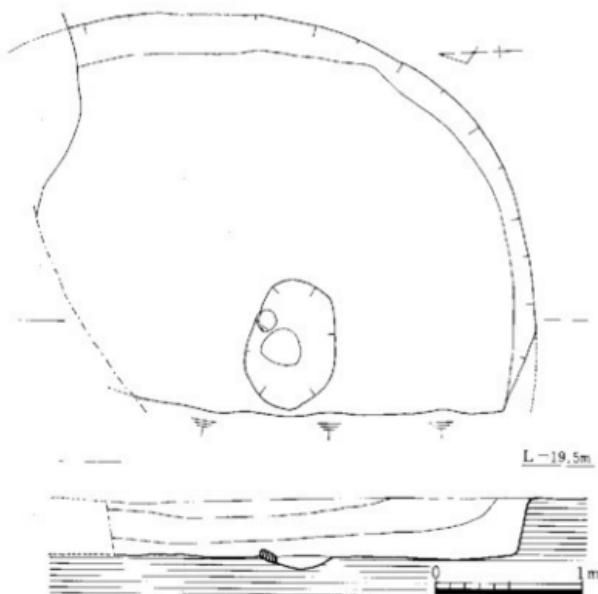


Fig. 18 1号住居址実測図 (縮尺1/40)

b. 遺物

住居址覆土などから石器（石包丁・石鎌・石斧・丸石）、土器（高坏・甕・瓶）がコンテナに3箱ほど出土している。遺物の大半は住居址覆土から、一部は古墳墓道の覆土からも出土した。

石 器 (Fig.19, 図版18)

石包丁 (2001) 小片で全形を知りえない。凝灰岩系の岩を石材とする。刃部は丁寧な磨きが施されている。

石 鎌 (2002) 打製の無茎石鎌であるが、小片で全形を知りえない。安山岩を石材とする。側縁の刃部は細かいリタッヂによる。

石 斧 太型蛤刃石斧の破片が2点出土しているが、大半は欠失している。石材は砂岩。1点は石斧の基部の破片である。他の1点は擂石の可能性も考えられる。

丸 石 3点が出土している。それぞれに形状・大きさが異なるが、3点とも表面は摩滅している。

土 器 (Fig.19, 図版18)

高 坏 坏部、頸部の破片がいくつか出土している。大半の土器の器面は風化を受けて調整技法は不明であるが、須久式土器の特徴を示す2点の口縁部の破片は、丹塗の磨研土器である。この2点の土器の胎土は緻密で、僅かに赤褐色の砂粒を含むことを特徴とするが、他の高坏の破片の胎土には認められない。

甕形土器 (2012~2016・2020~2025) 底部・口縁部の破片で全形を知りえない。口縁部は「くの字」状に外に折れ、弥生時代中期の特徴を示す。復元径は口径23~33cm。胎土は1~2mm程の長石・石英砂粒を多く含む。

壺形土器 (2017) 口縁部の破片で全形を知りえない。復元径は口径28cmである。

瓶 (2018~2019) 底部の破片である。7cm前後の底部径である。底部中央には径1~2cm程の孔が開けられている。胎土は1~2mm程の長石・石英砂粒を多く含む。

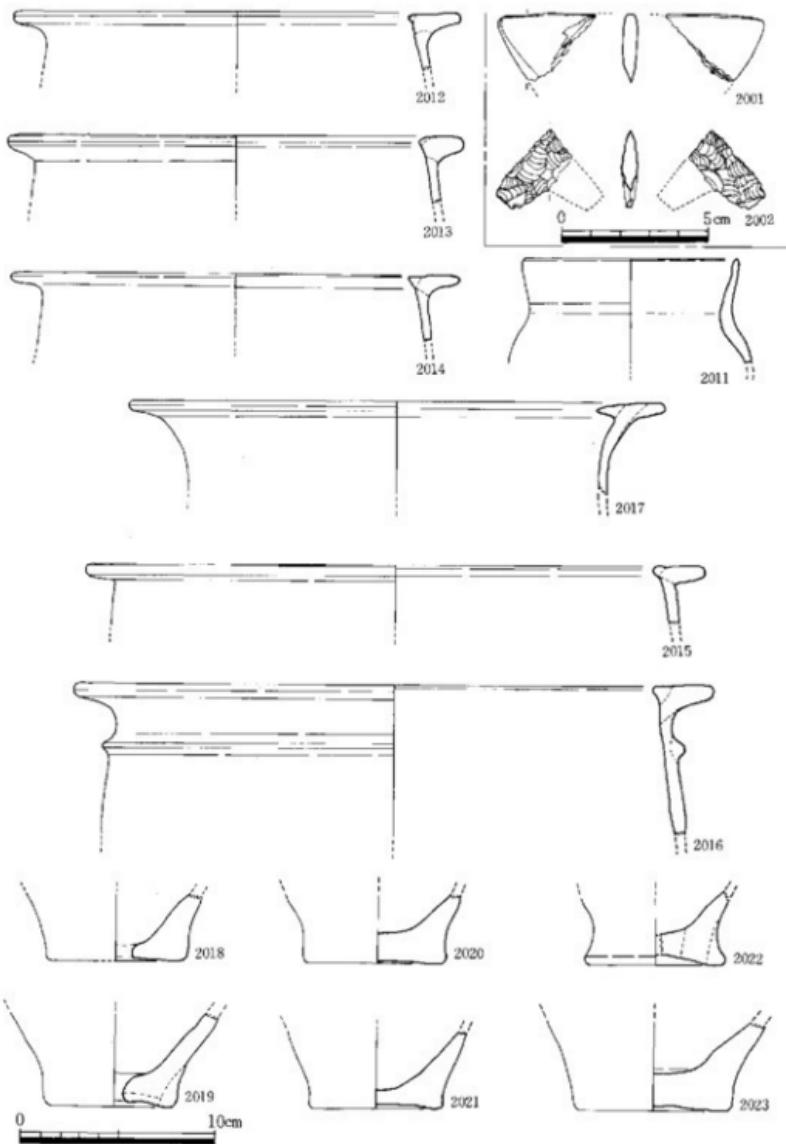


Fig.19 1号住居址出土遺物実測図（縮尺1/3, 1/2:2001・2002）

第4章 まとめ

今回の調査は、市域の東北辺部、玄界灘に面した三苦丘陵における初めての発掘調査であった。この調査では、弥生時代中期後半～後期初頭の堅穴住居址を1棟、古墳時代後期に築造された古墳1基を発見したが、どちらも大規模な擾乱や削平を受けており、良好な状態で遺存していたとは言い難い。この章では調査の成果をまとめるとともに問題点を取り上げ、今後の周辺地域における調査研究を進めるための手掛かりとした。

弥生時代の集落　これまでに実施した遺跡の分布調査などから、三苦丘陵において弥生時代の集落が遺存している可能性が極めて高いことは指摘されていた。今回の発掘調査の成果は分布調査結果の正しさを実証するとともに、遺跡の範囲がさらに海岸部近くまで広がる可能性を示唆するものである。今回の調査では1棟の堅穴住居址を発見するにとどまったが、本来は丘陵に入り込んだ狭い谷部を開む丘陵の緩斜面に集落が構成されていたと推定される。住居址からは生活基盤を明らかにするような遺物は出土していない。瓶が出土しているが、このことから直ぐに稻作と生活基盤とを直結して考えるのは、遺跡の立地する地形を考慮すれば危険であると言えよう。判断は今後の調査を得たなければならぬが、現状では、稻作が谷水田等で行われていたとしても生活基盤上で中心を成していたとは考えられない。

古墳の造営年代　出土遺物、特に須恵器は、これまでの出土資料の検討から、6世紀後半に生産の時期をもとめられよう。さらに年代を限定するのであれば、坏・甕は6世紀の第3四半世紀の特徴を示していることから、古墳の築造・初葬の時期を6世紀の第3四半世紀に位置付けるのが妥当と考える。追葬については、玄室内の擾乱等により葬送時の状況を知ることができなかったものの、土器を中心とした遺物の年代が時期幅を呈していないことから、追葬は行われなかつた可能性が高い。仮に追葬が営まれていたとしても、初葬から時間的に経過を経ていない段階、すなわち6世紀の第3四半世紀中にしか出土遺物の年代から考えられない。

被葬者　玄室内が大規模な擾乱を受けていたために副葬品の遺存状況は良好とは言い難いが、出土品から葬送時の様子の一端を知ることが可能である。さらに副葬品の品々は、被葬者および被葬者を中心とした集団の社会的性質を示しているといえよう。特に武具・馬具を中心とした副葬品は、周辺の同時期の古墳から出土した副葬品とは質的な異なりを示しているので武具・馬具を検討して被葬者および被葬者を中心とした集団について考えてみたい。

馬具は全て鉄製金銅張で、出土した辻金具・雲珠・鍍金具の残片から、もともと一組の馬具

として作られたものを使用していたことや、つくりが他の古墳出土の品々と比較して技術的に優れているは明らかである。

武具の副葬品の中でひときわ異質であるのが大刀の三累環頭の柄頭である。三累環頭の柄頭は、九州ではこれまでに鹿児島県国分市（亀ノ甲1号古墳）・長崎県生月町（山田古墳）佐賀県佐賀市（小清兵衛山古墳）・同県唐津市（宮の上古墳）・福岡県豊前市（黒部山古墳）の4例が報告されており、本例は九州では5例目、県内では2例目である。本古墳出土例に形態的に近似しているのは、長崎県の例である。この両遺跡間における関連性をあげると、1. 古墳築造年代が6世紀後半である。2. 海浜部に近い地点に古墳が築造されている。3. 古墳の立地する地域の農業生産基盤が極めて脆弱であることから、経済基盤を海に求めざるをえない。

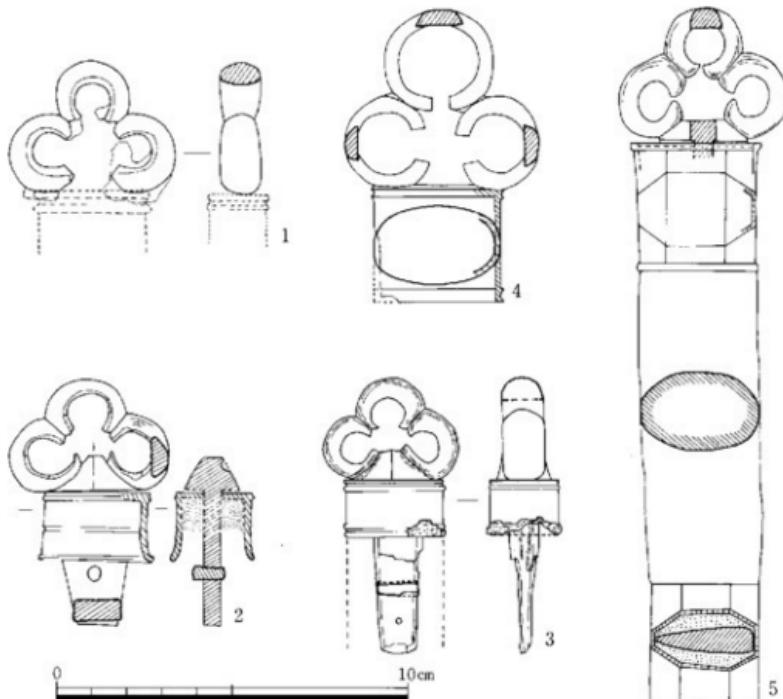


Fig.20 九州地方出土三累環頭実測図（縮尺1/2）

1. 三吉古墳群1号墳(福岡市) 2. 小清兵衛山古墳(佐賀市) 3. 黒部山古墳(福岡県豊前市)
4. 山田古墳(長崎県生月町) 5. 亀の甲1号古墳(鹿児島県国分市)

以上のことことが上げられる。これまでに同様な三累環頭大刀は、朝鮮半島の南半部、慶州などの古新羅時代の墳墓から出土していることが報告されている。とともに、日本国においても舶載品や傍製品と考えられている三累環頭大刀が各古墳から出土している。この大刀を副葬品とする被葬者もしくはその地域と朝鮮半島との関係は、いくつかに分類されよう。その中で九州地方北部に限定すれば、5世紀から6世紀にかけての工芸技術を含む文化の伝播行為そのもの中に、本古墳被葬者を代表とする地域の経済基盤が位置していた結果と考えられないだろうか。すなわち、地理的特性から、朝鮮半島との海上交易を含む交通に深く関与する海人集団を構成するひとつであるがために、他の古墳と比較して特異性を示す三累環頭の柄頭を代表とする品々が副葬品に用いられたのではないか。

古 墳 群 地元の人の話では1号墳から南30mのあたりを開削する以前には古墳1基が存在していたらしい。先述したように三苦古墳群には3基の古墳が残っていることから、少なくとも4基以上の古墳から構成されていたようである。古墳の立地から、丘陵の西斜面に各古墳に連なる墓道が設けられていたと思われる。最終的には、各古墳の調査を待たなければならぬが、三苦古墳群は同じ集団の墳墓であることは間違いないだろう。

今後の問題点 今回の調査では三苦遺跡群の一端を知りえたにすぎない。先に述べたように三苦丘陵における弥生時代の集落の規模やその生活基盤等は不明のままである。また、三苦古墳群を海人集団の墳墓と想定したが、その根拠は弱い。6世紀を中心とした集落が調査地の近辺に存在することは明らかであることから、生活の場、葬送の場の両面から解明する必要がある。

三苦遺跡群・三苦古墳群周辺主要調査報告書

福岡市教育委員会「和白遺跡群」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第18集 1971年

福岡市教育委員会「下和白塚原古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第55集 1980年

福岡市教育委員会「海の中道遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第87集 1982年

福岡市教育委員会「唐原遺跡一墳墓編一」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第161集 1987年

福岡市教育委員会「唐原遺跡一集落址編一」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第207集 1989年

参考・掲載文献

小田富士雄著「九州考古学研究 古墳時代編」「九州発見の三累環頭柄頭」学生社 1979年

小田富士雄他「古文化談叢 第11集」「岡為造氏収集 考古資料集成」九州古文化研究会

遺物番号	出土地点	器種	排図番号	国版番号	遺物番号	出土地点	器種	排図番号	国版番号
1001	1号墳後廻塚附近 須恵器・环	Fig. 14	国版12	1226	1号墳玄室	鉄劍	Fig. 15	国版14	
1002	1号墳後廻塚附近 須恵器・环	Fig. 14	国版12	1227	1号墳玄室	鉄劍	Fig. 15	国版14	
1003	1号墳玄室 須恵器・長頸壺	Fig. 14	国版12	1228	1号墳玄室	鉄劍	Fig. 15	国版14	
1004	1号墳後廻塚附近 須恵器・壺	Fig. 14	国版12	1229	1号墳玄室	鉄劍	Fig. 15	国版14	
1005	1号墳後廻塚附近 須恵器・壺	Fig. 14	国版12	1230	1号墳玄室	鉄劍	Fig. 15	国版14	
1101	1号墳玄室 大刀・三葉環頭	Fig. 15	国版12	1231	1号墳玄室	鉄劍	Fig. 15	国版14	
1102	1号墳玄室 大刀	Fig. 15	国版12	1232	1号墳玄室	鉄劍	Fig. 15	国版14	
1103	1号墳玄室 大刀	Fig. 15	国版12	1233	1号墳玄室	鉄劍	Fig. 15	国版14	
1004	1号墳後廻塚附近 須恵器・壺	Fig. 14	国版12	1234	1号墳玄室	鉄劍	Fig. 15	国版14	
1005	1号墳後廻塚附近 須恵器・壺	Fig. 14	国版12	1235	1号墳玄室	鉄劍	Fig. 15	国版14	
1201	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1236	1号墳玄室	鉄劍	Fig. 15	国版14	
1202	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1237	1号墳玄室	鉄劍	Fig. 15	国版14	
1203	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1238	1号墳玄室	鉄劍	Fig. 15	国版14	
1204	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1239	1号墳玄室	鉄劍	Fig. 15	国版14	
1205	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1240	1号墳玄室	鉄劍	Fig. 15	国版14	
1206	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1301	1号墳玄室	筋引馬・留め金具	Fig. 15	国版13	
1207	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1302	1号墳玄室	筋引馬・留め金具	Fig. 15	国版13	
1208	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1303	1号墳玄室	筋引馬・留め金具	Fig. 15	国版13	
1209	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1401	1号墳玄室	鉄	Fig. 17	国版16	
1210	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1411	1号墳玄室	留め金具	Fig. 17	国版16	
1211	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1412	1号墳玄室	留め金具	Fig. 17	国版16	
1212	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1421	1号墳玄室	鉄	Fig. 17	国版16	
1213	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1422	1号墳玄室	鉄	Fig. 17	国版16	
1214	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1423	1号墳玄室	鉄	Fig. 17	国版16	
1215	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1424	1号墳玄室	鉄	Fig. 17	国版16	
1216	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1425	1号墳玄室	鉄	Fig. 17	国版16	
1217	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1431	1号墳玄室	留め金具	Fig. 17	国版16	
1218	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1432	1号墳玄室	留め金具	Fig. 17	国版16	
1219	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1433	1号墳玄室	留め金具	Fig. 17	国版16	
1220	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版13	1434	1号墳玄室	留め金具	Fig. 17	国版16	
1221	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版14	1435	1号墳玄室	留め金具	Fig. 17	国版16	
1222	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版14	1436	1号墳玄室	留め金具	Fig. 17	国版16	
1223	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版14	1437	1号墳玄室	留め金具	Fig. 17	国版16	
1224	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版14	1438	1号墳玄室	留め金具	Fig. 17	国版16	
1225	1号墳玄室 鉄劍	Fig. 15	国版14	1439	1号墳玄室	留め金具	Fig. 17	国版16	

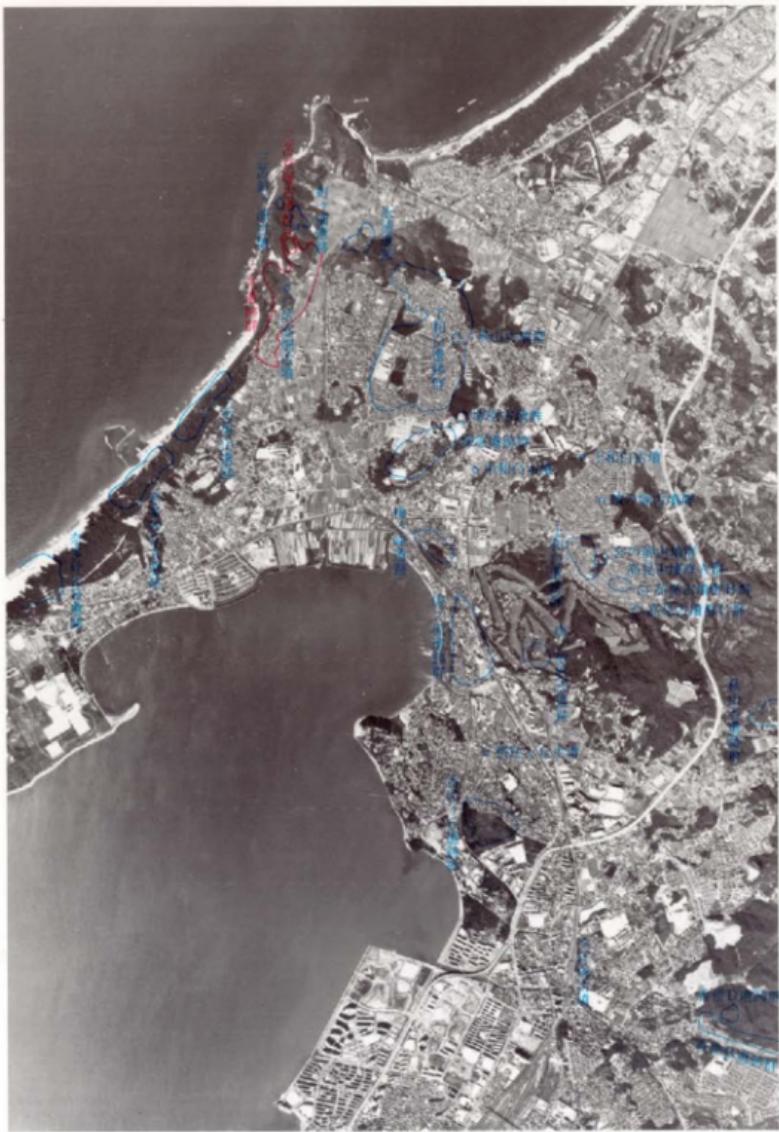
第1表 出土遺物一覧表(1)

遺物 生物	出土地点	器種	標 番号	国版 番号	遺物 番号	出土地点	器種	標 番号	国版 番号
1440	1号墳玄室	鍍金具	Fig. 17	国版16	1561	1号墳玄室	杏葉	Fig. 16	国版15
1441	1号墳玄室	鍍金具	Fig. 17	国版16	1562	1号墳玄室	杏葉	Fig. 16	国版15
1501	1号墳玄室	鍍金具 A	Fig. 17	国版16	1563	1号墳玄室	杏葉	Fig. 16	国版15
1502	1号墳玄室	鍍金具 A	Fig. 17	国版16	1571	1号墳玄室	杏葉	—	国版15
1511	1号墳玄室	鍍金具 A	Fig. 17	国版16	1572	1号墳玄室	杏葉	—	国版15
1512	1号墳玄室	鍍金具 A	Fig. 17	国版16	1573	1号墳玄室	杏葉	—	国版15
1521	1号墳玄室	鍍金具 B	Fig. 16	国版15	1574	1号墳玄室	杏葉	—	国版15
1522	1号墳玄室	鍍金具 B	Fig. 16	国版15	1601	1号墳玄室	鍍金具	Fig. 17	国版16
1523	1号墳玄室	鍍金具 B	Fig. 16	国版15	1602	1号墳玄室	鍍金具	Fig. 17	国版16
1524	1号墳玄室	鍍金具 B	Fig. 16	国版15	1603	1号墳玄室	鍍金具	Fig. 17	国版16
1525	1号墳玄室	鍍金具 B	Fig. 16	国版15	1604	1号墳玄室	鍍金具	Fig. 17	国版16
1531	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	1605	1号墳玄室	雲珠	Fig. 17	国版16
1531	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	1701	1号墳玄室	用途不明鐵製品	Fig. 17	—
1533	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	1702	1号墳玄室	用途不明鐵製品	Fig. 17	—
1534	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	1801	1号墳玄室	ガラス玉	Fig. 17	国版16
1535	火 番				1802	1号墳玄室	琥珀玉	Fig. 17	国版16
1536	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	1811	1号墳玄室	耳飾	Fig. 17	国版16
1537	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2001	1号堅穴住居址	石包丁	Fig. 19	国版18
1538	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2002	1号堅穴住居址	石鏟	Fig. 19	国版18
1539	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2011	1号堅穴住居址	弥生土器・短柄壺	Fig. 19	国版18
1540	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2012	1号堅穴住居址	弥生土器・甌	Fig. 19	—
1541	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2013	1号堅穴住居址	弥生土器・甌	Fig. 19	—
1542	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2014	1号堅穴住居址	弥生土器・甌	Fig. 19	—
1543	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2015	1号堅穴住居址	弥生土器・甌	Fig. 19	—
1544	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2016	1号堅穴住居址	弥生土器・甌	Fig. 19	国版18
1545	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2017	1号堅穴住居址	弥生土器・甌	Fig. 19	—
1546	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2018	1号堅穴住居址	弥生土器・瓶	Fig. 19	国版18
1547	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2019	1号堅穴住居址	弥生土器・瓶	Fig. 19	国版18
1548	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2020	1号堅穴住居址	弥生土器・甌	Fig. 19	国版18
1549	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2021	1号堅穴住居址	弥生土器・甌	Fig. 19	国版18
1550	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2022	1号堅穴住居址	弥生土器・甌	Fig. 19	—
1551	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2023	1号堅穴住居址	弥生土器・甌	Fig. 19	国版18
1552	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2024	1号堅穴住居址	弥生土器・甌	—	国版18
1553	1号墳玄室	雲珠	Fig. 16	国版15	2025	1号墳玄室	弥生土器・甌	—	国版18

第2表 出土遺物一覧表(2)

図 版

図版 1



図版2



1) 調査地周辺航空写真（昭和23年頃）



(1) 調査地周辺航空写真（平成元年頃）

図版 4



(1) 1号墳伐開後の状況（南西から）



(2) 1号墳伐開後の状況（南東から）



(1) 閉塞施設（南西から）



(2) 閉塞施設（北東から）



(3) 渠道覆土状況（南西から）



(4) 蔽道覆土状況（南西から）

図版 6



(1) 墓丘遺存状況（南西から）



(2) 墓丘西半部除去後の状況（南西から）



(1) 墓丘遺存状況（南東から）



(2) 墓丘西半部除去後の状況（南東から）



(3) 墓丘土除去後の状況（南東から）

図版 8



(1) 墓丘土除去後の状況（南西から）



(2) 石室掘り方（南西から）



(1) 敷石除去後の玄室奥壁部



(2) 敷石除去後の玄室玄門部

図版10



(1) 美道床面敷石状況



(2) 美道床面敷石除去後の状況



(3) 玄室床面前半部敷石状況



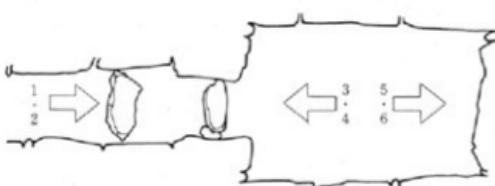
(4) 玄室床面前半部敷石除去後の状況



(5) 玄室床面奥半部敷石状況

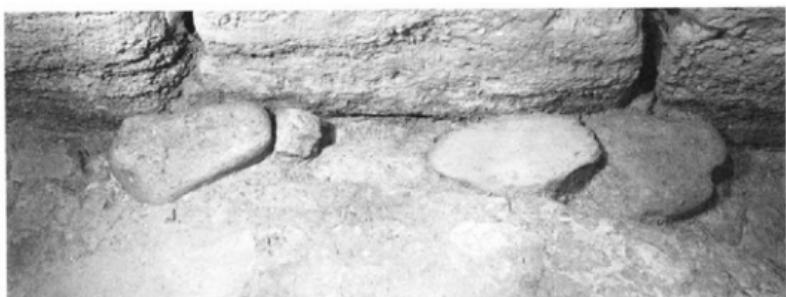


(6) 玄室床面奥半部敷石除去後の状況





(1) 玄室奥壁腰石の詰石

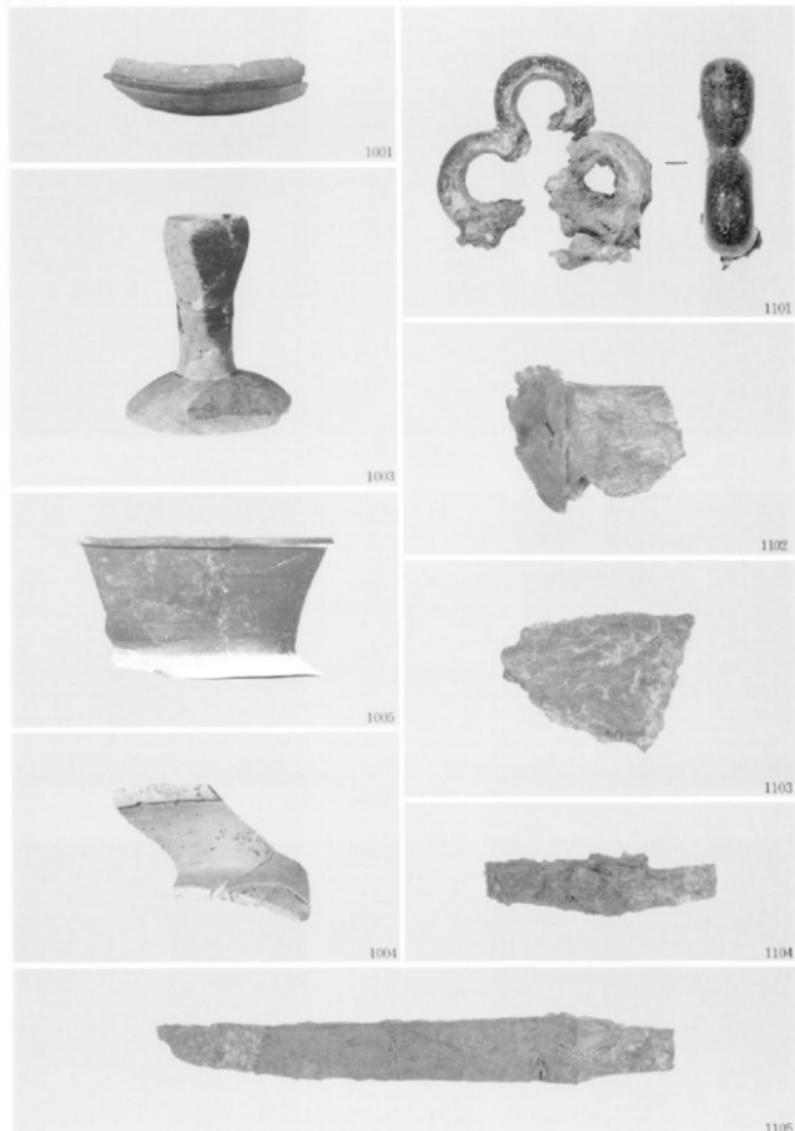


(2) 玄室右側壁腰石の詰石

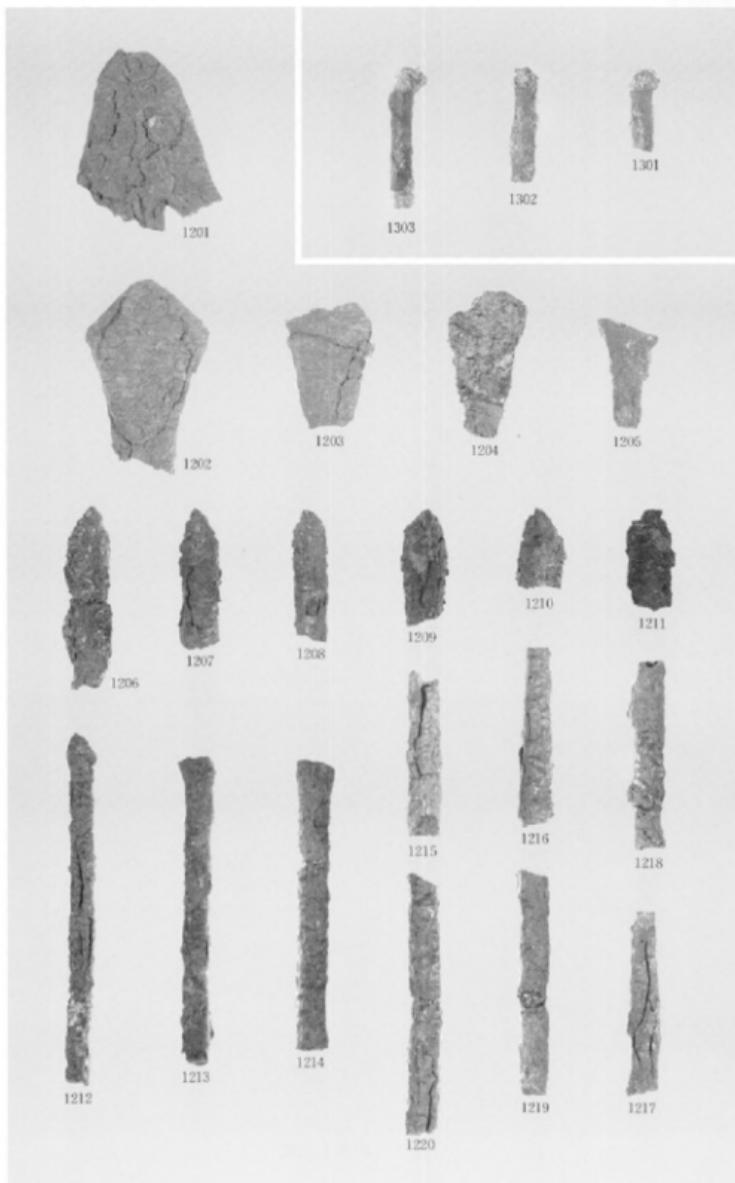


(3) 玄室左側壁腰石の詰石

図版12

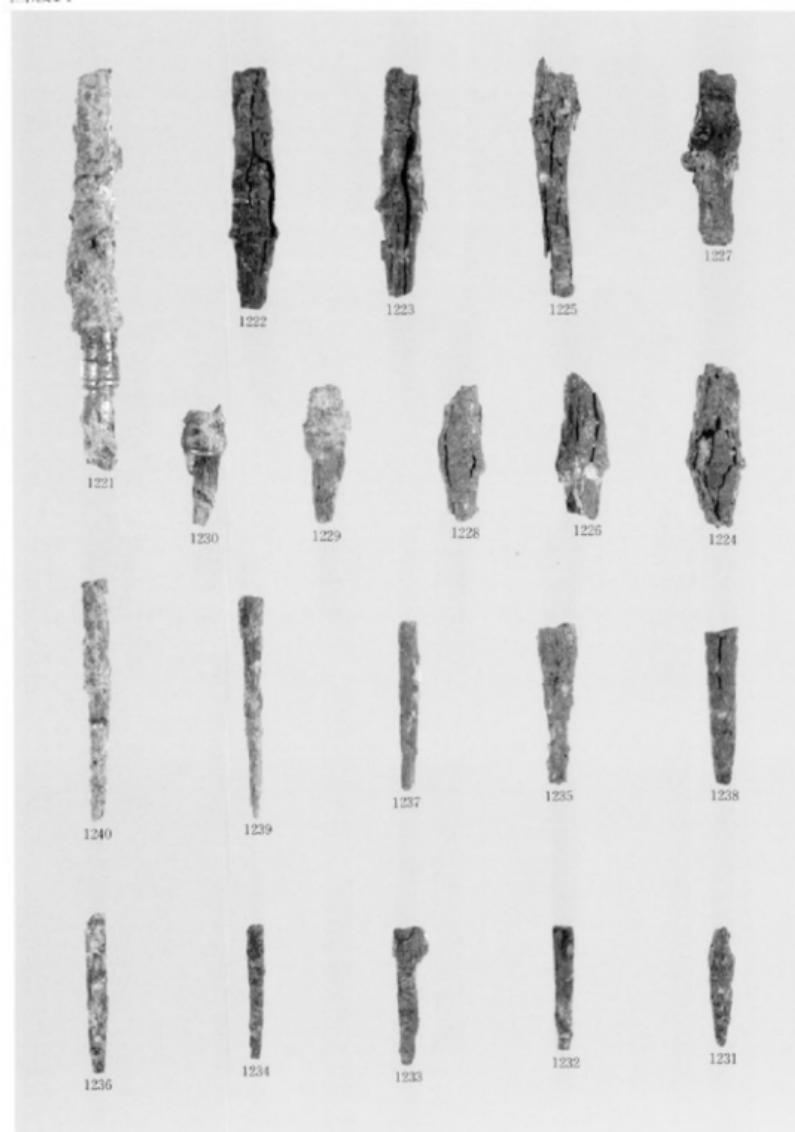


(1) 1号墳出土遺物

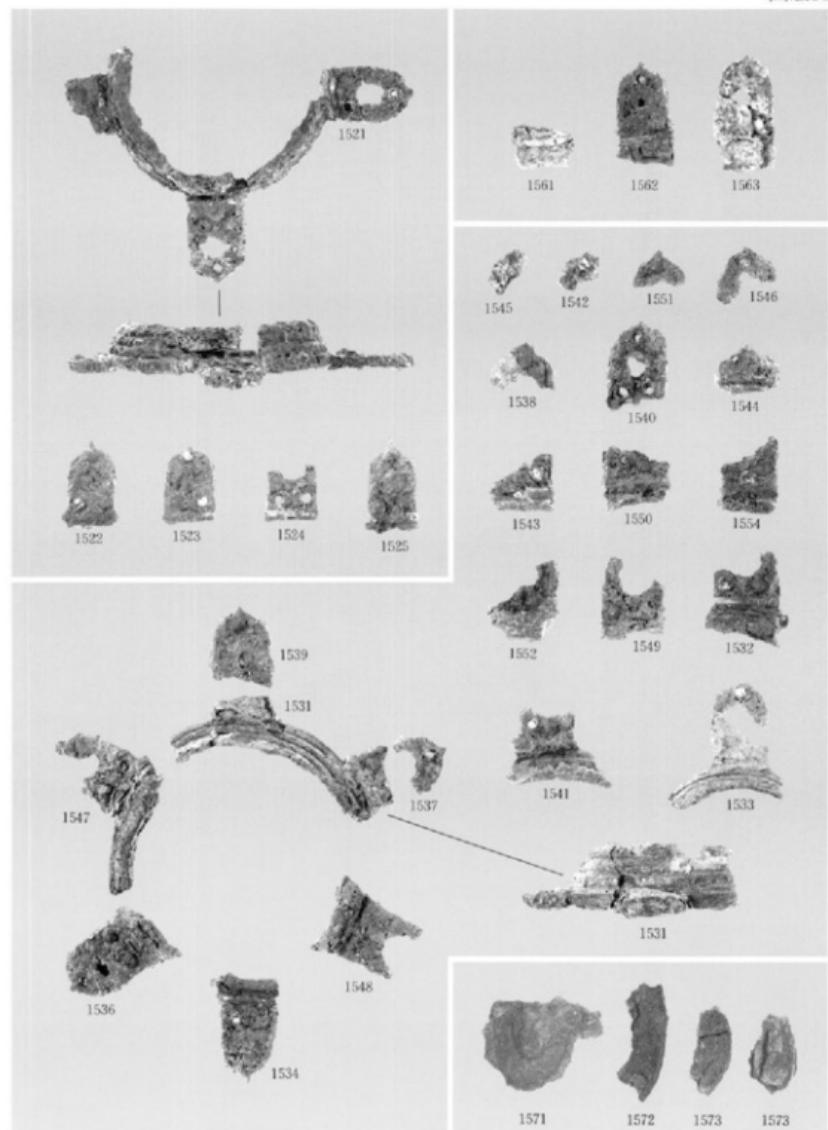


(1) 1号墳出土遺物

図版14

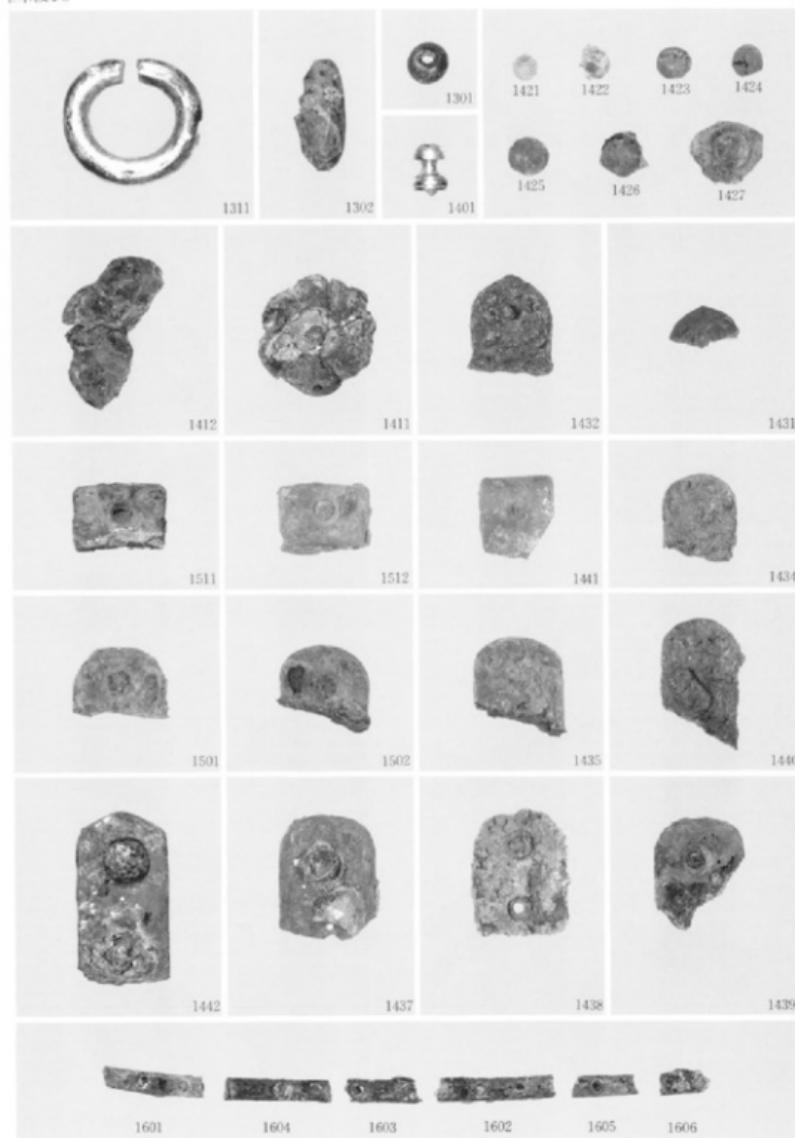


(1) 1号墳出土遺物

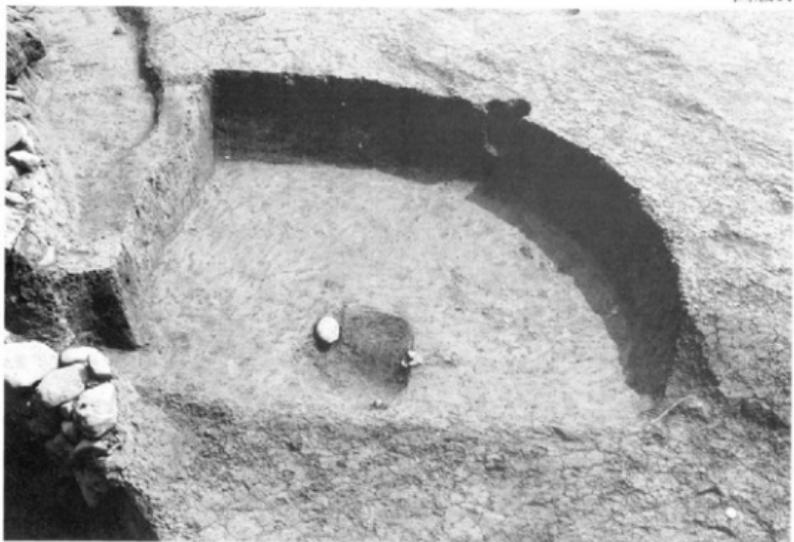


(1) 1号墳出土遺物

図版16



(1) 1号墳出土遺物



(1) 1号住居址完掘状況（南西から）



(2) 1号住居址覆土堆積状況（北東から）

図版18



(1) 1号住居址出土遺物

三苦京塚古墳

福岡市埋蔵文化財調査報告書第243集

1991年（平成3年）3月15日 発行

編集発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 ダイヤモンド印刷株式会社

MITOMAKYOZUKA KOFUN

Excavations and Studies of
Rounded Tomb
in Mitoma, Fukuoka

March 1991

THE FUKUOKA CITY BOARD OF EDUCATION
JAPAN